

洋語教授法史研究

茂住 實男 著

学文社

江苏工业学院图书馆
藏书章

洋語教授法史研究

——文法・訳読法の成立と展開を通して——

茂住實男 著

学文社

著者略歴

茂住 實男

1941年 鳥取県生まれ

1971年 青山学院大学大学院文学研究科博士課程修了

1976年 文学博士

現在 拓殖大学外国語学部教授

編著書

『明治期地方教育史の比較研究』（共著。1978年，地方教育史研究会）

『資料集成 旧制高等学校全書』全9巻（共編。1985年完結，旧制高等学校資料保存会刊行部）

『英語科教育法入門』（共著。1988年，学文社）

洋語教授法史研究

——文法 = 訳読法の成立と展開を通して——

◎検印省略

1989年8月25日 第一版発行

著者 茂住 實男 ©

発行者 田中 千津子

〒153 東京都目黒区中目黒1-2-6

電話 03 (715) 1501 (代)

発行所 株式会社 学文社

振替 東京3-98842

乱丁・落丁の場合は本社でお取替します
定価はカバー，売上カードに表示

印刷所 シナノ印刷

ISBN 4-7620-0332-8

序

慶応義塾大学名誉教授
日本英学史学会会長

高 梨 健 吉

日本の近代化は世界の驚異であつた。ペリーの来航は幕末の一八五三年。太平の夢から覚めた日本は、欧米の植民地争奪戦の渦中に巻き込まれてしまう。隣中国は、中華思想を固執して、阿片戦争以来、欧米列強に蚕食されてゆく。小国日本の生きる道はただ一つ、攘夷思想を捨てて、欧米に追いつき追い越すことである。富国強兵を旗印にして、先人たちの血と汗の努力が続く。そして一九〇五年、日露戦争で大國ロシアを破り、日本は欧米列強に仲間入りする。これは日本が開国して僅か五十年。欧米人がこれを奇跡なりと思うのは無理もないが、日本人は猿真似が上手だからだと考えるのは浅見である。

日本の近代化は一朝一夕にして出来上がったものではない。明治の新しい時代の近代化の原動力となつたのが英学である。欧米の文物を学ぶためには、まず英語を知らなければならぬ。日本人にとって外国語学習は目新しいものではなかつた。すでに古くから漢学の伝統があり、幕末には蘭学がある。オランダ語と英語は、同じゲルマン語の中でも近い兄弟語である。明治の英学が幕末の蘭学の伝

統を受け継いだのは幸運であつたというべきであらう。

江戸時代の蘭学は明治期の英学の育ての親として考えると、さらにその重要性が認識されると思われる。英語学習法も、幕末のオランダ語学習法を知らなければ正しく評価することはできない。変則は誤りで正則を良しと決めつけるのは、歴史を知らぬ者の愚論である。外国の書物を正しく理解することに主眼を置いた教授法はけっして間違つたものではなかった。明治時代の英語教授法を正しく理解するためには、幕末のオランダ語教授法を知らなければならない。残念ながら、この方面に関する研究は今まで不十分であつた。本書はその欠陥を補うものであり、蘭学から英学に至る外国語教授法の流れを明快に、そして詳細に説いた画期的な研究である。

茂住實男氏は蘭学史と英学史の少壮研究者で、いくつかの大学で英語教授法を講義しておられる。日本英学史学会、日本英語教育史学会の幹事役として多忙な仕事を引き受けながらも、熱心に研究発表をしておられるのは敬服に堪えない。氏は温厚篤実の好漢で、学会においても信望が篤い。大いに将来を期待したい。

本書は英語教授法の源流を蘭語教授法に遡り、外国語教授法の歴史を明晰に論述した労作である。とかく英語教師は前ばかり見て後ろを見ない。温故知新という。本書によって日本の英語教育は視野を広げ、さらに深みを増すことができると信ずる。

はし が き

わが国の英語教授・学習においては昔から、その取り扱いの可否は別にして、文法がきわめて重要視されていることは衆目の認めるところである。豊田實博士はその著書『日本英学史の研究』（昭和十四年、岩波書店）のなかで、わが国の文法研究とその水準について次のように述べられている。

世界の何れの国に較べても、日本程多くの人が英語を文法的に研究してゐる国はないらしい。日本へ来た英米人が、種々文法上の細かい質問を受けて困らせられることが往々あるやうである。英語を母国語とする外人で、日本へ来て初めて自分に英語が解つてゐないことが解つた、と言つた人があつたと聞いたこともある。外人をしてかゝる嘆声を発せしめる程の微に入り細を穿つた英文法の研究と、中等学校等における実地教授との關係は、教授上の問題として別に考究さる可きであらう。たゞ私は茲に、我が国における英文法研究の最高水準は世界の斯学界の權威と比肩し得るものであることを認めて意を強うするものである。（二六二頁）

わが国が英語研究・教育において英文法を重視するようになった起源は、遠く蘭学の時代にまでさかのぼる。蘭学研究の過程で、文法を研究しその知識を駆使してオランダ文を翻訳するという文法＝訳読法が成立するのであるが、その教授・学習法は、わが国の洋学研究が蘭学（時代）から英学（時代）へと移り変わるとともに、英語教授・学習の方法としても引き継がれ、明治前期の英学の隆盛に多大の貢献をした。そうした文法＝訳読法の果たした役割を考慮すれば、文法が重視され、教育の場で文法教授に重きの置かれてきたのは十分首肯される。

ところで従来の洋学研究においては、その内容・特質、歴史、著訳書・教材、辞書、文法、発音などの研究が盛んであったのに比べて、洋語教授法に関する研究は少ないように思われる。先行研究は必要に応じて本文中に掲げるの
でここでは示さないが、蘭学分野においては上述のように学問の内容、時代に及ぼした影響、語学的研究などに主たる関心が払われ、教授法そのものについては研究の一部としてしか取り上げられていないことが多い。また英学の分野にあつては、蘭学の教授法が英学に導入されたことが指摘されてはいるものの、それ以上の考察は加えられていないように思われる。殊に教授法そのものを蘭学時代から英学時代をとおして一貫して取り扱った研究は、管見によれば、ほとんど無かつたように思われる。すなわち、洋語教授法の研究は未開拓の分野であつたと考えられるのである。

以上のことから、本書では、蘭学研究における最初の教授・学習法である漢文訓読的蘭語解読法の考察より始めて、文法Ⅱ訳読法の成立ならびに展開過程を考察し、あわせてその学統にも言及した。さらに文法Ⅲ訳読法が英語教授・学習法となつていく過程を明らかにし、英学における同法の展開を考察した。なお蘭学・英学において主流であつた文法Ⅲ訳読法の展開を述べる一方で、語学習得の方法として別に存在していた音声を重視する教授法を必要に応じて取り上げ、並行して論じている。

未熟ではあるがこのような研究成果を発表できるようになつたのは、多くの方々のご指導や先行研究より受けた学恩の賜物である。なかでも本研究の契機を与えられ厳しくご指導頂いた故久保田正三工学院大学教授、大学院時代一貫してご教導頂いた木下法也青山学院大学名誉教授、研究会をとおしてご指導頂いた故仲新青山学院大学教授には、公私ともにお世話になり、心より感謝申し上げます。

本学位請求論文の審査をご担当頂いた主査木下法也教授、副査仲新教授、同岡田章雄教授、同大澤茂教授（いずれも

当時）に深甚なる謝意を表する。

研究を進めるうえで快く相談に応じて頂いた蘭学分野の片桐一男現青山学院大学教授、英学分野の出来成訓現神奈川大学教授に深謝申し上げる。

拙稿全部に目を通し、多くの貴重なご指摘を下さった伊村元道玉川大学教授に深謝申し上げます。

本書に対し身に余る序文をお寄せ頂いた高梨健吉日本英学史学会会長・慶応義塾大学名誉教授に心よりお礼申し上げます。

また研究を進めるに当たり多くの図書館にお世話になった。殊に国立国会図書館、長崎市立博物館、長崎県立長崎図書館、静嘉堂文庫、国立公文書館内閣文庫、東京大学史料編纂所、京都大学附属図書館、大阪女子大学附属図書館、立教大学図書館、明治学院大学図書館、慶応義塾図書館、法政大学図書館、早稲田大学附属図書館、青山学院大学間島記念図書館などの好意に対し深甚なる謝意を表する。

一九八九年七月

茂住 實男

目次

序

はしがき

序章 合理的思想の発達と蘭学

合理的思想の興隆 1

新井白石の洋学観 4

吉宗の実学主義と洋学 5

第一章 オランダ語学習における文法「訳読法」の成立

第一節 漢文訓読的蘭語解読法

一 青木昆陽による蘭語解読法 11

二 『解体新書』訳述と会読方式 20

三 長崎蘭通詞のオランダ語学習法 27

四 前野良沢のオランダ語研究——漢文訓読的蘭語解読法の完成—— 31

五 漢文訓読的方法によるオランダ語学習——大槻玄沢を通して—— 48

第二節 文法＝訳読的蘭語学習法の成立

72

第二章 オランダ語教授・学習法の展開と英語教授・学習法

83

第一節 創業期における英語学習の方法

83

一 英語教育の開始 83

二 長崎蘭通詞の外国語学習法 87

1 長崎蘭通詞のオランダ語学習法 (87)

2 長崎蘭通詞の英語学習法 (89)

三 天文方における外国語学習法——馬場佐十郎を通して—— 109

1 馬場佐十郎のオランダ語教育——文法＝訳読法を江戸に広める—— (109)

2 馬場佐十郎のロシア語学習 (118)

3 馬場佐十郎の英語学習 (123)

第二節 蘭学塾におけるオランダ語教授法の系譜

152

一 文法＝訳読法の展開 152

二 教育機関としての蘭学塾の発展 159

1 蘭学塾安懷堂、象先堂 (159)

2 蘭学塾の組織と運営 (163)

3 蘭学塾にみる教授法・学習法 (167)

三 蘭学塾適塾——文法＝訳読法による教授・学習法の完成—— 169

第三節 蘭学塾的英語教授法

193

- 1 適塾の誕生 (169)
- 2 教授組織・教育課程 (172)

- 一 蕃書調所・開成所における英語教授法 193

- 1 蕃書調所の創設と目的 (193)
- 2 蕃書調所のオランダ語教授法 (196)
- 3 英学科の分科独立 (204)
- 4 英語教育の方法と英語教材 (209)
- 5 開成所と英学教育 (223)

- 二 英学塾における英語教授法——慶応義塾を通して—— 228

- 1 福沢諭吉の英語学習と教授法 (228)
- 2 英学塾慶応義塾の教育課程 (238)

第三章 米国人による英語教授法

265

第一節 最初の米国人英語教師マクドナルド

- 一 マクドナルドの来日 266
- 二 利尻島における英語教授 267
- 三 長崎における英語教授 269
 - 1 マクドナルド来崎前の蘭通詞の英語学習 (269)
 - 2 長崎における英語教授 (271)

3 「エゲレス語辞書和解」のことなど (277)

第二節 長崎英語伝習所

287

一 英語必要性の増大 287

二 洋語伝習所設立 291

三 唐通事の英語学習 293

四 長崎英語伝習所 295

五 英語伝習所その後 299

第三節 米国人宣教師による英語教授法

304

一 宣教師による英語教育 304

二 宣教師による英語教授法——S・R・ブラウンを通して—— 316

第四章 正則英語と変則英語

第一節 英学塾と英語塾

357

一 英学塾と英学塾的(英語)教授法 358

二 英語塾と英語塾的(英語)教授法 360

第二節 正則英語と変則英語

364

一 正則英語と変則英語 364

二 変則英語批判始まる 371

付録

開成所と英学教師

はじめに

I 開成所の変遷

1 番書調所・洋書調所 (381)

2 開成所 (385)

II 開成所の英語教育——英学教師の任用を中心に——

1 番書調所・洋書調所の英語教育 (394)

2 開成所の英語教育 (400)

III 開成所の英学教師一覧

付録1 「会訳社」について (444)

付録2 「ロシア留学生市川文吉に贈られた英文送別文」について (451)

あとがき

索引

*本書に引用の資料には原則として句読点を付した。

序 章 合理的思想の発達と蘭学

合理的思想の興隆

わが国における西洋學術の研究は、寛永十六年（一六三九）の鎖国（令）によって必ずしも中絶した訳ではなかった。例えば、医薬・航海・外科・本草などに関する西洋科学書が、將軍や幕閣への献上物として、あるいは彼らや諸侯の注文によってわが国に輸入されていたことは、蘭館日記によって明らかである。⁽¹⁾

西洋學術研究上重要な文献である漢訳洋書の輸入が極度に困難となつたのは、貞享二年（一六八五）以降である。すなわちこの年、長崎聖堂の儒者向井元成（一六五六―一七二七）が唐より舶載の書籍を検閲中に「實有詮⁽²⁾」という「天主教勸法之書」を発見し、これを上申した。これに対して幕府は、『實有詮』は焼却処分とし、舶載の荷物一切は持ち帰るよう命じるとともに、船頭など責任者に厳しい処分を下した。以後この厳令を先例として検閲が行なわれるようになったため、漢訳洋書の輸入が極めて困難となつたのである。検閲の基準の概要は次の資料によって窺うことができる。

貞享二丑年、右三拾二種之外、實有詮と申天主教勸法之書、唐船持渡之内より向井元成改出し言上仕候処、焼捨被仰付候、以来者邪宗門之事相記候書者、一句半言二而も可申上旨、被仰渡候二付、其後者耶蘇之儀者勿論、其徒利瑪竇等之噂、人物風俗聊二而も書載有之分者、申上候時々焼捨、或者墨消二相成、云々。⁽³⁾

（御制禁書籍訳書）

臣謂、西土曆比二之中夏一、其浅深猶三皮相之与二骨髓一、而国家故事、嚴二禁耶蘇一。凡有二天主耶蘇号及李瑪竇等之姓名一

者、不^レ問^二書好否^一、一切焚^二諸崎陽之地^一。西曆之不^レ講以^レ此、云々。(建部賢弘・中根元圭訳『暦算全書』叙文。享保十八年正月、一七三三)⁽⁴⁾

右の資料から、キリスト教の書、天主耶蘇(Jesus)の名称や李瑪竇(利瑪竇、Matteo Ricci)などのキリスト教関係者の名の付された書、彼らの噂や人物風俗を記した書は、一切焼却等の処分対象となったことが明らかである。また禁書処分が書籍の内容の良否を問わず行なわれたため、科学的暦学の研究に支障を来したことも記されている。貞享の厳令によって西洋學術の研究が重大な影響を被ったのである。こうした厳令を下したことは、幕府の西洋科学に対する無関心を如実に物語るものといえよう。

貞享期は五代將軍綱吉の治世の初期にあたり、この後文治政治の最盛期元禄期を迎える。幕府のいわゆる武断政治より文治政治への転換が可能となったのは、少しく遡る慶安から寛文にかけてであった。すなわち、幕藩体制の経済的基盤である本百姓の成立・固定化、およびその上に位置する支配機構の制度的完成により、幕府は武断的な諸政策を緩和しつつ、文治政治への転換を図るに至ったのである。統治の指針となったのが、幕府儒官林家の家学朱子学である。幕府はこれを官学として庇護し、これを利用して国内思想の統一を図った。その結果、熊沢蕃山(二六一九—一六九二)、山鹿素行(一六二一—一六八五)などの反朱子学派儒者の弾圧が行なわれるとともに、宗教的統制も併せて強化されたのである。殊に寛文三年(一六六三)、武家諸法度を改めるに際し、これにキリシタン禁制の条項が加えられたことにより、キリシタンに対する弾圧は一層熾烈を極めたのである。キリスト教徒の一掃を狙う幕府は、さらに貞享三年(一六八六)諸大名にキリシタン検挙の命令を下している。こうして国内の教徒を絶滅に追いやる一方、上述のように貞享の厳令によってキリスト教の国内侵入を防止しようとしたのであった。⁽⁵⁾

このような一連の諸政策を可能ならしめたのは、農村における自給自足の生産の維持と、これを基盤に経済的社会

的安定が当面それなりに維持されていたからに他ならない。西洋科学・技術の研究に障害を与えるような貞享の厳令に関しても、社会が経済的に安定している場合、科学技術の改良に積極的な関心を抱くこともなく、さほどの問題として意識されなかったと考えられる。

しかしながら、社会の安定化に伴い次第に経済的交流が促進され、また商品経済の発達につれて商品の支配階級や農民への浸透が増大の一途をたどり、その結果、諸藩も農村も経済的圧迫を受けることとなった。そして、財政支出の増加に苦しむ諸藩にも、家計の重圧にあえぐ農民にも、ともに農業の生産力の向上を求める気運が活発となり、農業に関する知識・技術の改良が試みられ、さらに天文等の関連分野の協力によって一層の技術開発が行なわれ始めた。元禄十年（二六九七）、宮崎安貞（二六三一一六九七）は『農業全書』を著わしているが、同書はそうした農業の知識・技術を集大成した書である。⁽⁶⁾その刊行は、当時の農業が技術改良に基づいた新しい農業へと転換を図りつつあったことを示している。

儒学における古学派（山鹿素行、伊藤仁斎一六二七―一七〇五、荻生徂徠一六六六―一七二八）の発達と軌を一にするように、医学において古方派の名古屋玄医（二六二八―一六九六）が「親試実験」を唱え始めたのが元禄時代である。⁽⁷⁾さらに中国の本草学の翻訳・紹介の域を脱し、国内の有用植物の調査・蒐集を行なう本草学の出現をみるのもこの時期である。⁽⁸⁾このような合理的実証的学問や思想の興隆期において、識者たちが西洋學術の優秀性を認識するのにやぶさかではなかったことは自然の成り行きであった。

例えば、『大和本草』（宝永六年、一七〇九）の著者で筑前の儒者貝原益軒（一六三〇―一七二四）は、檜林鎮山（一六四八―一七二二）の外科医書『紅夷外科宗伝』（宝永三年、一七〇六）に序文を寄せて、

和蘭国、又名紅夷、其国僻遠在極西、然近古以来、彼土之商舶、毎歳来湊于長崎港、寄客絡繹而不絶、其国俗窮

理、往々善外治、治療病有神効、其術可為師法、我邦人学之者不尠矣。其法比並于中夏、為端的捷徑、要約而多効。⁽⁹⁾云々。

と述べ、オランダ外科が漢方のそれより卓越していることを称え、その理由をオランダの窮理(學術)に置いている。同じ頃、長崎の役役人の出身で、朱子学を京都の儒者南部草亭に、天文学を長崎の天文家小林謙貞(一六〇一―一六八三。オランダ流量術の祖と称される)に学んだといわれる西川如見(一六四八―一七二四)は、その著『天文義論』(二卷。正徳二年、一七二二)において、天文学を「命理ノ天学」(中国の天文学)と「形氣ノ天学」(西洋の天文学)に分類している。そして、「性命道德ノ学」すなわち「命理ノ天学」は、「理ニシテ上古明カニ末代衰フ」が、「天地測量ノ術」すなわち「形氣ノ天学」は、「事ニシテ、上古ハ粗ニ末代精シ」と述べ、実測技術に依拠する西洋天文学の進歩、優秀性を認めている。しかし続いて彼が「嗟惜哉、紅毛ハ形氣ノ天学ニ達シテ、何ソ命理ノ天学ヲ知ラザルカ」と慨嘆していることは、彼の朱子学的限界を示すものであろう。⁽¹⁰⁾ともあれ、如見が西洋天文学を評価し、その科学的技術を認めた先見性は看過されてはならない。

新井白石の洋学観

幕府の中枢にあり、西洋學術の優秀性を認識した人物は、新井白石(一六五七―一七二五)をもつて嚆矢とする。合理的実証的思想あるいは自然科学の顕在化してきた時代に、朱子学者のなかでもっとも開明的であると評された白石⁽¹¹⁾が、西洋科学の卓越性を認識したのは自然であった。

白石が西洋學術を直接知る契機となったのは、宝永六年(一七〇九)のイタリア人潜入宣教師シドチ(Siddotti, G. B.)の尋問である。その経緯は『西洋紀聞』にまとめられている。

尋問の結果、白石は「凡そ其人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文地理の事に至ては、企及ぶべしとも覺えず」とシドチに感心し、殊に彼の天文地理に関する科学的知識には率直に敬意を表わしている。しかし一方、キ